

熊野再三

山崎正之

かつて島崎藤村は「木曾路はすべて山の道である」(『夜明け前冒頭』)と書いた。

そのころの(というのは小説の舞台としての明治維新の時代および藤村の執筆時期を指すのだが)木曾路が、いったいどれほどの「山の中」であったのか、縦横に自動車道路の走る現在の様相からでは、おそらく想像を超えるものであつたらう。

まったく同じ筆法で、今日の熊野路の、山の深さをいかに強調しようとも、たとえ「宇江敏勝氏の『山びとの記—木の国果無山脈—』(中公新書・昭55)に描かれた明治から戦前にいたる生活実感には、およびもつかないだろうことを思うのである。いや、この本の読者は、いま現役の山林労働に従事する著者の動勢に、熊野の山の奥深いありようを知らされよう。

去年の秋、徳島で開かれた学会に出席する道中で、熊野本宮に詣る機会があつた。

新宮駅前からバスでおよそ一時間、十津川に沿う国道一六八号線のすぐ脇の台地で、鬱蒼とした深い木立の中である。正面は三棟四殿の上社、中央の本殿(証誠殿)に主神の家都美御子大神を祀るが、素盞鳴尊と同神、また熊野信仰は神仏習合思想による本地を持つので、ここでは阿弥陀如来とされる。以下十三柱の神々・仏菩薩が坐す延喜式内社だ。

一般に熊野三山あるいは三熊野と呼ばれるのは、本宮大社と、熊野川の川口に近い新宮の速玉大社、新宮西南の那智山の那智大社とをあわせている。速玉大社も式内社であるが、那智大社だけがそうでないことは、三山を並び称するまでに過程のあつた

ことを考えてよいのだから。

古社といわれるものの多くがそうであるように、この三山の場合も、開山というか創建年代についてはまったくわかっていない。伝えられるところでは、本宮大社と速玉大社の二社について、出雲の熊野大社(『出雲国風土記』に記す呼称で、現在は熊野神社が通称である)にその溯源を発するといふ。いまからでは確めようもないが、『古事記』『日本書紀』のいわゆる出雲神話において、出雲国が死者の国・祖霊の国、常世の国にもっとも近接した地域と目されており、そこから生じた上代信仰と同質の様態を南紀の熊野信仰の中に見出すとき、両者の関わりはまず間違いなからうと思われる。

然しここで忘れてならないのは、先にも見たように熊野信仰には神仏習合思想が色濃く投影していて、その内容の解明になお多くの余地を残す、という点である。たとえば、那智大社だけが三山の中で別様なのは、何といつてもあの百三十三メートルに達する落差を擁して落下する滝を御神体とした、特殊な信仰を除外できない。三山を

トータルとしてとらえるならば、こうした熊野の風土に注目しなればなるまい。そこにはきわめて素朴な意味での山岳信仰が、根をおろすはずだとの実感が迫る。そしておそらく、圧倒的な自然の営みと点在する人間の生活の矮小な心情のうちに、仏教を支えとして始めて心安まる思いが定着したのではあるまいか。

それにしても、帝王御幸の事として平城上皇をはじめ、清和上皇・宇多法皇・花山上皇・白川上皇・堀川院・鳥羽法皇・後白河上皇・後鳥羽上皇・土御門上皇・龜山上皇等にわたるとされ、なかでも後白河法皇は実に三十四度を数える。これはいったいどのように理解すべき事態なのだろうか。京都から大阪に出て、西熊野街道を田辺までたどり、そこから山峡に入り万呂・三栖・高原・近露・野中・湯ノ峰を経て本宮に至る中辺路と、田辺を通りさらに海岸沿いに南下し新庄・周参見・古座・三輪崎・新宮と、半島の南端をめぐる大辺路の二コースが参詣路の主たる道筋であった。

海といひ、山といひ、あるいは川といひ、その何れもおおよそ京都では思いも及

ばぬスケールであったろう。熊野の地は、まず何をおいても自然の量の重層的な奔流にこそ、その真髓があるといっている。帝王が、女院が、公卿が熊野詣におもむくとき、こうした自然によって初めてもたらされる靈威を浴びることで、神仏の存在を確信したのではなかったか。

熊野信仰は時代を下るにつれて、信仰仰の底辺を次第に拡大し、「蟻の熊野詣」といわれるほどに領主・武士そして農民にまで及ぶのである。江戸時代には「伊勢へ七度、熊野へ三度——」といわれたそうだがこのあたりになると社寺参詣にかなりレクリエーションとしての要素が浸透していた。ただし熊野ばかりはそんな波にも洗われることなく、厳しい情況を保ったがゆえに伊勢詣の半分といったところだったのだろう。

平安後期、後白河法皇の撰に成る『梁塵秘抄』(当時の俗謡集)に、

熊野へ参らむと思へども、従歩より参れば途遠し、すぐれて山峻し。馬にて参れば苦行ならず。空より参らむ。翼賜べ若王子。

といったものが収録されており、熊野詣の

道程が容易ならざる行路であったことを物語っている。

現在の熊野本宮は、明治二十二年の洪水によりもっと下手の河原に直く近い、大斎原から移されたのだという。国道をへだてた向い側の雑貨屋さんの横道を入ると、右手にこんもりと茂った森が見える、その中の平地がその跡である。以前、四月初旬に訪れた折り、都心の小学校の校庭(平均的な意味で)ほどの平地の周囲を満開の桜が取りまいており、余りのみごとさ・幻想的な美しさに声をのんだ経験がある。

今回は、晩秋の小雨に濡れて深閑と静まりかえっていた。樹間の小暗い道をぬけると、そこだけがぱっかりと明かるい長方形の空間なので、ちょうど劇場の舞台のような印象なのだ。私は同行のAさんとしばらくその静寂な雰囲気ひたつたのち、河原に出た。いまでは洪水などとても信じられない川幅と水量だったが、この一帯も静けさに包まれて、時々木々の上方から聞える鳥の鳴き声が妙になまなましく生動した。低くたれこめた雨雲に上流に立ちほだかる山なみの奥行きが消されたようだった。